

1 周年記念シンポジウム(2006年11月18日)

「地域で取り組むプライマリ・ケア」内容要約

開催場所：名古屋大学医学部第一講義室

講演：菜の花診療所(大阪) 院長 山寺慎一氏

師長 岡崎和佳子氏

出資者の会代表 小川亮氏

問題提起：理事長 伴信太郎(名古屋大学教授)

パネリスト：中日新聞生活部次長 安藤明夫氏

日本プライマリ・ケア学会常務理事 木戸友幸氏(木戸医院)

司会進行：副理事長 松村眞吾(株式会社メディサイト)

問題提起(伴信太郎)

地域における保健・医療・福祉の連携が重要になってきているが、病院医療の延長としてしか機能してない場合が多い。地域医療は総合医療でなければならず、地域医療の専門家として、幅広い臨床能力を持つプライマリ・ケア医が、その任務を果たしていくことが望まれる。地縁・血縁によるサポート力が低下していく中で、地域における連携を探っていかなければならず、菜の花診療所の実践に学んで、地域発のプライマリ・ケアの発信、草の根的な普及を図っていく方策を探っていきたい。

報告「地域でのプライマリ・ケア実践を報告する」(菜の花診療所)

(小川)

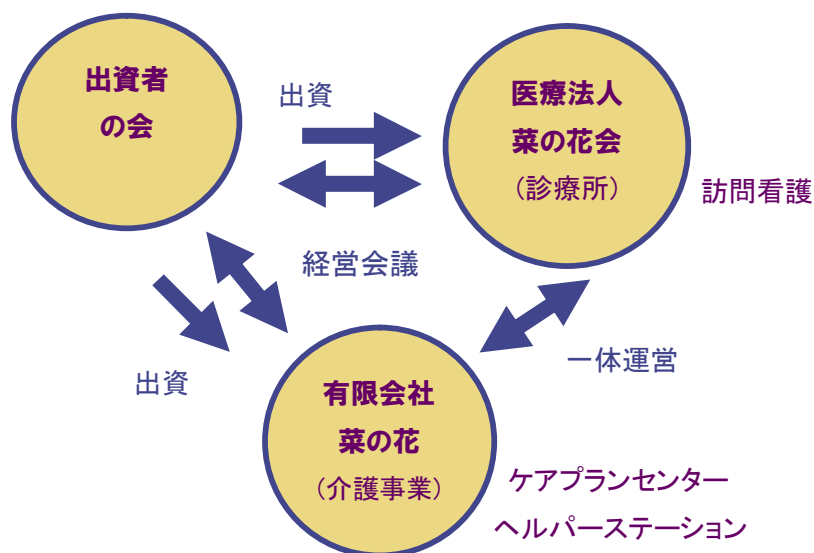
菜の花診療所は大阪市生野区にある。町工場と住宅が混在する下町で、在日の方が多いという特徴を持つ。かつて彼らには健康保険が無かった。そうした経緯もあって、1989年以降、地域の労働組合や住民有志、行政関係者などが月1回の勉強会を重ねていき、借金ではなく、地域の出資で診療所を作ろうと運動して1991年に出来たのが菜の花診療所である。1口5,000円からで総額7,000万円を集めた。熱意と真心の表れである。

(岡崎)

菜の花診療所は「そこに行けば何とかなる」「出かける医療」をモットーにしている。歴史的には医師の交替、介護保険開始などで苦労して来た時期があるが、03年以降、山寺院長が着任して安定化した。運営は、診療所と介護事業所(有限会社)、出資者の会が三位一体で行っている。

医療と介護が二本柱である。「地域で最後まであなたらしく、私らしく」ということで訪問看護を始めた。これは介護保険前からのものであり、日常生活の中での看護を目指したものである。そして地域全体で支えることを考えて、民生委員、町会役員、MSW(医療ケースワーカー)から花屋、ケーキ屋まであらゆる地域の資源を活かした関係作りを行ってきた。高

高齢者・患者さんを連れ出すこと、散歩から銭湯、喫茶店や居酒屋に一緒に行って、地域の中で関わりを作り、その人の生活から学ぶことをしている。看取りも公式は無い。関わる中で家族も自分も変わっていく。不安が自信、安心になっていく。



(参考)運営スキーム図

(山寺)

在宅患者は、最近でこそケアマネ、病院などの紹介が増えてきたが基本は地域からである。外来は半径 500m 圏、在宅は自転車で移動できる半径 2^{km} 圏。地域コミュニティが希薄化しているが、却って地縁のない(二代目で無い)医師でも勤めることが出来る。ただし全てを引き受けることは出来ない。また「困った時に助けて欲しい」「話を聴いて欲ニーズと専門的、医学的に「治したい」という欲求の間のギャップもある。ただ、「家族が寝たきりになったらどうしよう」「独り暮らしなので心配」という地域のニーズを何とかしなければならない。そこで医師としては他職種との協働が必要になる。チームの中で最終的な責任を負う立場として、決断し、交渉していかなければならないが、ともかく一人ではない。地域モデルとしては出来るところから連携すること・・・患者さん、病院、薬局、ケアマネ、配食サービスなど。様々なギャップは訪問看護師が埋めてくれる。

外来に連日受診する 88 歳の女性がいた。目まいが不安だからということで、毎日、訪問看護を入れた。ケアマネとも連絡を取りつつ、看護師中心の体勢を採った結果、やがて落ち着いた。

ケアマネは介護における最重要人物であるので、密な連携は欠かせない。ヘルパーとの連携も重要である。ケアカンファレンスや連絡ノートでの情報共有、看護師による吸痰の指導などでケアの充実を図る。

(総括的に)

小川：出資が2,000万円、残っている。自立経営を実現したい。そうして、NPOなど各種団体、事業所などと連携を深めていきたい。

岡崎：後継者を育てていきたい。そしてコンビニのような存在の診療所であり、想いを拡げていきたい。

山寺：主役は訪問看護師である。小さな努力を積み重ねて、より良い連携を作っていく。

パネル討論

地域で出来ること、やっていくこと

(安藤)

大阪の生野だから出来たということではなく、広く普及させることが出来るかどうかのポイントではないか。格差社会が問題となっているが、単に病気を治すということではなく、安心して暮らせることが大切である。地域、家庭が崩壊していく中で、キーワードは「連携」だろう。子供への虐待も医療機関がキャッチしたりする。病気ではなく人を診る医療であること、だろう。

(木戸)

7,000万円の資金を集めたということは凄いことである。マネジメントがしっかりしていたのだろうと思う。訪問看護師が主役であるという指摘には賛成する。ただ一種のスーパーマンがいたから出来たのではないか？ 後継者作りが必要ではないか。

(岡崎)

地域での連携として、子供会や障害者団体と一緒に花見をやるなど、色々なことを積み重ねてきた。また、役所、地域の会合にも参加して顔馴染みを作っていた。そうして連携を作っていくのは大変ではあったが・・・

(山寺)

そうした岡崎氏の積み重ねてきたものを、後継者としての自分は引き継いでいかなければならない。自分は非社交的な性格ではあるが、一步を踏み出すことは大変でも、例えば、一度、病院を訪問すれば、後は自然に出来るようになった。一步を踏み出すことが大切だ。

(小川)

福祉団体との連携を作っていく。ボランティア休暇を活用して若者を連れ出すなどで拡がりを作っていく。地域の零細事業所といかに繋げていくか、が課題となっている。

(安藤)

プライベートで自閉症協会の活動を行っているが、発達障害のことは中々、世間に理解されない。とにかく広報していくこと、そして外に連れ出して繋がりを作っていくことであ

る。苦しんでいる人、弱い人に対して、医療者も正しい情報を持って欲しい。そのためにメディアも役割を果たしていかなければならない。

(木戸)

木戸医院は半世紀近い歴史があるが、庶民の町にあって、医師会として企画された住民の健康づくりの会合などに積極的に参加して溶け込むように努力した。介護保険が出来た時は、積極的に関わって行った。ケアマネとも会合を持った。医師は地域の問題に関わっていくべくだと思う。地域のケアの会合などには医師が参加しないことが多いが、だからこそリーダーとして参加して行くことが望まれる。



地域との交流をどう作っていくか？

※会場からの発言

医師の地域医療の場を作っていきたいと医療モールを計画した。地域と医療の関係を作る鍵は介護にあるようにも感じたが、どういようにすれば、地域保健の仕組みが作っていただけるのだろうか。つまり、病気予備軍と医療の連携を作っていかなければと思うのだが、どうだろうか。健康講座の開催などで情報発信を、町内会や老人会などと一緒にやっていくことが出来ればと思っているが。

(伴)

地域がコミットする診療所だが、労働組合などの活動が無ければ難しいのか。

(小川)

組合と言っても地域の組合であるので、基本は生活者としての活動である。ただ組合の役

員は出資しても受診しなかった。外に出かけていくこと、何時でも受けます、といった姿勢が大切だった。当初は健康教室などを積み重ねて地域の支持を集めて行っていった。こういったことが診療所を育てる基になったと思っている。

(山寺)

問題は多忙を口実に検診も受けない人がいること。そういった予備軍を相手にする難問がある。それをどうするか。

(木戸)

菜の花の試みは、医師会との摩擦を招いたように想像するが？

(岡崎)

とにかく「よろしく」と頭を下げて回った。会合などは欠かさずに出席、休日・夜間の当番も積極的に引き受けた。有志の医師の仲間の応援も得るようにした。

※会場からの発言

かつて福井県の僻地診療所に勤務していた。地域に入って困らなかったのは、看護師、事務が地元の人だったから。生活情報は彼女らからもらった。健康相談も出る人は限られていたが、看護師らが「押しかけ」訪問して回った。そういった「地域」のない大都市で、どういう地域医療があり得るのだろうか？

(安藤)

「地域」って何だろうかと思う。うさん臭くさえある。一方で確実な積み重ねがあるわけで、菜の花が花屋、パン屋の声を掛けて回っていることなどの可能性を感じる。医療ならば、例えば小児科医院での院内保育所、学校への係わり合いを考えて欲しい。

(木戸)

歴史が信用を作る。長く続けることが一つか。世襲の善悪はあるが、地域に根付いて「見える」汗をかくこともあって自分としては良かった面もあると思う。

(岡崎)

確かに地域コミュニティが希薄化している。ただ、人が人に優しくするということはあるはず。喫茶店で5~6人が集まって話をする。そんなところに患者さんを集めてコミュニケーションする。そういったことから始まる。町会長との交流も大切だ。

(山寺)

問題発生を契機にコミュニケーションが生まれる。そういった可能性もあるのではないか。

(安藤)

NPOの活動をフォローする、専門家を動員するなど、いろいろな経験者や専門家の活動機会を増やしていくことが望ましい。

討論を聴いて：NPOの課題

(松村)

キーワード的には、外に出ること、小さなことの積み重ね、各種連携といったことが出た。
私たちに出来ることは何か。

(伴)

地域力をうまく引き出していく。医療機関はその力を持っていると思う。私たちのNPOも医療者から地域社会まで幅広いメンバーがいる。活動を積み重ねていくことが大切であり、保健・医療・介護のニーズを積極的に採り上げて、いろいろな情報を提供していきたい。

文責：松村真吾